



防長 と海



その記録と記憶

12

「諸家ヨリ感状」（村上家文書5）の内、左より織田信長、細川高国、松永久秀、大内義長、大友宗麟の署名と花押・印章

戦いと友好①

重要文化財 村上家文書

【村上家文書】

中世、瀬戸内の海上交通を支配した、いわゆる「村上水軍」のうち、最も勢力のあった「海の大名」能島（のしま）村上家に伝わった文書群です。

そのうち、毛利氏家臣となる以前の慶長4年（1599）までの文書199通が、「過所旗」と共に、平成27年（2015）に国の重要文化財に指定されています。

それは、海上交通の要衝である瀬戸内海において、水軍を編成し活動した戦国期武家の具体的な活動と変遷を知る上で最もまとまった資料群として歴史的価値が高いと認められたことによるものです。

【内訳】

文書の形態別の内訳は、一紙物106通、卷子装93通（9巻）です。

また差出人別の内訳は、毛利家75通、小早川家73通、室町幕府2通、豊臣家15通、諸大名8通、伊予国関係者15通、村上家5通、その他6通となっています。毛利家と小早川家で、全体の75%を占めているのが特徴です。

さらに、時期に注目すると、天正年間（1573～91）のものが155通と全体の78%を占めています。

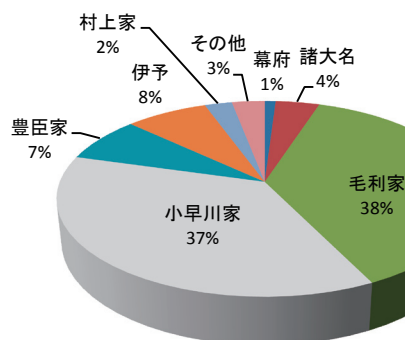
【主な文書と内容】

最も古い文書は、永正～大永年間（1504～27）頃、細川高国が村上宮内大夫に忠節の褒賞により讃岐国塩飽島代官職を与えたものです。一方、最も新しい文書は、慶長4年と推定される毛利輝元書状で、村上景親に与えた土地の管理を惣領の元吉に指示しています。

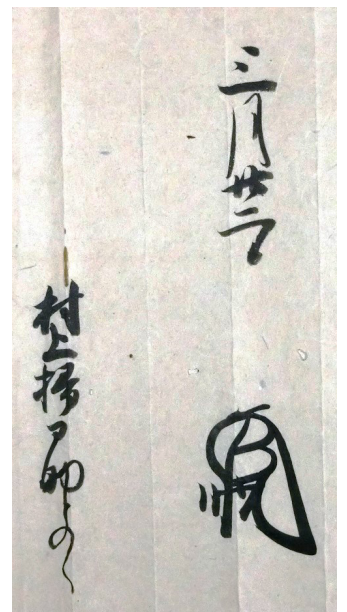
以下、代表的な文書をいくつか紹介してみよう。

①足利将軍が出した文書

13代将軍義輝が永禄3・4年頃



差出人別内訳



足利義輝の花押
（村上家文書3）

（1560・61）に毛利氏と尼子氏の和睦に尽力するよう村上武吉に命じたものがあります。村上氏の実力が幕府に認められていたことを示しています。

②毛利氏や小早川氏の起請文（きしょうもん）

毛利氏や小早川氏が村上氏へ提出した起請文が4通残っています。起請文とは、ある事柄について偽りのない旨を誓い、もし偽りがあった場合は神仏の罰を受けるであろうという旨を記した宣誓書です。起請文を取り交わすこと自体、両者の関係がうまくいっていない証ですが、決定的な対立を一時的に回避できるという点で意味を持っていました。永禄13年（1570）、天正10年（1582）、天正13年（1585）と、異なる時期の起請文が残っていることは、能島村上氏が決して毛利氏の水軍ではなく、自立した存在だったことを示しています。なお、永禄13年（1570）に村上武吉が毛利氏に対して提出した起請文も毛利家に残されています。そこには、誠意を強調するために、血判が捺されています（『毛利家文書』244号）。

③小早川隆景が出した文書

小早川隆景が出した文書が47通と一番多く残っているのも特徴です。小早川氏は水軍を持ち瀬戸内海に勢力を伸ばしていた家で、隆景は毛利元就の三男でした。そのため、毛利氏側では隆景が中心となって能島村上氏との交渉に当たっていました。その小早川水軍の総司令官である乃美宗勝の文書も17通とまとまって残されています。時期的には、能島村上氏が毛利氏から離反した来島村上氏と抗争した天正10年代前半に集中しており、能島村上氏との交渉において乃美宗勝が重要な役割を果たしていたことがうかがえます。

④周防国秋穂（あいお）荘をめぐる文書

毛利氏が能島村上氏を自陣営に留めるために、天正10年代に周防国秋穂荘（現山口市）において千貫（石）の土地を与えたことに関する文書もまとまって残されています。秋穂にはそれ以前に土地を与えられていた給人が複数いたため、まとまった土地を捻出するのに毛利氏は苦勞しています。またこの件に関する能島村上氏との交渉には、毛利氏直属水軍の統括者である児玉就方・就英父子が関わっており、いわゆる「水軍」同志のつながりをうかがわせます。なお、小早川氏もこの件では尽力しています。

⑤豊臣氏の関係文書

豊臣氏の関係文書もある程度まとまって残されています。このうち秀吉自身が出した文書2通は、天正10年（1582）に信長配下の武将として中国地方制圧に乗り出した秀吉が、能島村上氏を自陣営に誘ったものです。また、福島正則・戸田勝隆・増田長盛らが天正15年（1587）に出した文書は、秀吉によるいわゆる「海賊禁止令」に関わるものです。これらは、「海の大名」能島村上氏の存立に関わるものでした。

⑥「諸家ヨリ感状」

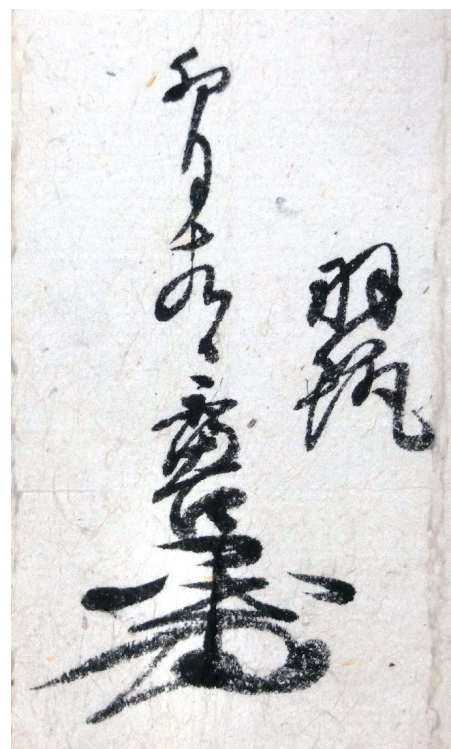
「諸家ヨリ感状」という題箋が付された卷子も注目されます。ここには、この卷子が仕立てられた江戸時代に「諸家」と認識された人物から能島村上氏に出された13通の文書が収められています。

人物の詳細は、表のとおりですが、そのうち9通の文書には、斐紙（ひし）という当時の最高級紙が使われていることがわかります。ここからは、斐紙を使用できる彼らの勢力（財力）と共に能島村上氏に対する一定の敬意を感じることができることができます。

この卷子は、まさに、畿内以西の有力者に一目置かれつつ、等距離外交を行っていた「海の大名」能島村上氏の姿を今に伝えるものと言えるのかもしれません。

№	差出人	性格
1	大友宗麟	豊後の大名。
2	大友宗麟・義統	豊後の大名。義統は宗麟の子。
3	大内義長	周防の大名。
4	松永久秀	三好氏の家臣。
5	細川高国	幕府管領。
6	一色藤長	将軍の側近。
7	三好実休	細川氏の家臣。
8	織田信長	尾張の大名。
9	松浦隆信	肥前の大名。
10	河野通直	伊予の大名。
11	天野元政	安芸の国人。元就の七男。
12	豊臣秀長	豊臣秀吉の弟。
13	佐世元嘉	毛利氏の家臣。

「諸家ヨリ感状」の差出者
（村上家文書5）



羽柴秀吉の署名と花押
（村上家文書272）